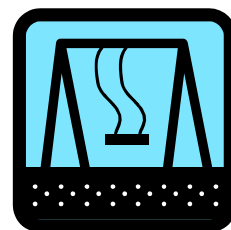


不着届け...電話番も思い出に。



以前わだちのコラム(のような)で「学童」について触れたことがある。昨年春から働き始めて、今年で二年目。子供と接する仕事はそれまでしたことがなく、ここまで手探りでやってきたが、漸くではあるけれど、「自分の感触」を掴めるようになってきた。

2か月前、夏休みの出来事。働く両親にとって、それはもっとも「学童」を必要とする季節。私が働く渋谷区の施設は、夏休み中も毎日運営している(日・祝は要別途申請)。そしてほぼ毎日のように利用する子供もいる。そんな子供にとっては「学童で過ごす日々が、夏の思い出」となる。だからこちらも、そのような子供が少しでも「夏休みらしさ」を感じられるようなプログラムを用意し、子供を迎えていた...(つもり)。

昨年の夏も感じたのだが、夏休みの子供というのは独特のテンションがある。普段通っている時はそうでもないのに「一体どうしてしまったの?」と思わせるような振る舞いをする時がある。そんなある日、低学年児童を校門へ送っていった際、その子供の母親と立ち話をする機会があった。その親曰く「家にいれば子供も、ただクーラーの効いた部屋で、テレビを見ながらゴロゴロ過ごしてしまうので、とても助かっている(生活にメリハリがつき)」とのこと。「なるほど」と感じるのだが、「まだ低学年の子供には酷な場合もあるのでは?」とも思った。



共働き家庭ならば、親が学童保育に通わせようとするのはある意味当然で、安全面などを考慮すれば、子供にとってもそれは仕方のないことかもしれない。しかし大勢の、それも異学年の児童を預かる施設では、時に子供の自由を束縛したり、彼らにとって「居心地のよい場所」ではないのかもしれない。普段ならまだしも、それがその他多くの子供にとって学校へ通わなくてもいい、そして「自由な時間」であるはずの夏休みなものだから、当然鬱憤や不満はたまる一方だ。それが先ほどの「いったいどうしてしまったの?」というようなテンションに表れてしまうのかも....。

子供とはいえ様々な事情を抱えている。そして今年の夏も、殆どの日中を家庭以外で過ごさなければならない子供がいた。そんな彼らと接する中で、私自身の将来のビジョンがますます明確になってきた。数ヶ月前の夏の日に、私は「彼らの夏の日が少しでもいい思い出となるように」と願い、現場で働いた。そして将来の進路がほぼ決まった今、彼らに心からの感謝をしている。(前田)



編集長後記

~これから、これから。~

わだちの編集部員になって3年。これまでさまざまなOB・OGの方のインタビューや寄稿に触れて、たくさん刺激を得た。ディレクターの先輩や、教師をしながら大学院に通われている先輩...等々、いろいろな道を歩んでいる先輩の話聞き、少しずつ自分がなりたいものの本質が見えてきたように思える。

私はセミナーを出て大学生になり、なんとか就職活動をする時期にたどり着いた。就職セミナーにも参加し、いろいろな講義を聞いていると、わだちで取材をさせていただいた諸先輩方の言葉の意味が、改めてわかるようになってきた。

都庁にお勤めの先輩、中村さんの『個のためではなく、全体の利益を考える』というような職にも興味がわき、「民間の企業でもそういったことができないものか?」と考えるようになった。しかし、資本主義社会では個の利益を考える傾向が強いと感じた。

そうした状況を変えてみたいとの思いから、最近では政治への関心もわいてきた。世の中にはさまざまな職業があり、いろいろな職業や、モノとのつながりを自分の肌で感じるようになったことが、大学生になっての一番大きな獲得だと考えている。

就職氷河期といわれているが、セミナー時代とこの3年間で得たものを、最大限に生かし、自分の信念を曲げずに戦い抜きたいと思う。(一ノ瀬)